現地に学ぶツアー「愛農会に学ぶ旅」

～愛農会が私たちに問いかけるもの～

原　卓郎
（東海研事務局次長）

3月21日（土）に、三重県伊賀市にある「（公社）全国愛農会」を訪問し、村上真平代表（家族農林漁業プラット・フォームジャパン代表でもあります）のお話をうかがいました。参加者は、三重たねネットワーク、岐阜農民連、愛知農民連の方々を始め、15名でした。

１．訪問の経緯

この企画のきっかけは、昨年10月の東海自治体問題研究所会員総会において行われた、関根佳恵愛知学院大学准教授の「国連『家族農林漁業の10年』に学ぶ新潮流～持続可能な社会に向けて～」と題した記念講演にありました。

その内容は、参加者に新鮮な感動と関心を呼び起こしましたが、話の中で、国連「家族農林漁業の10年」を日本で推進する組織の代表が、三重県伊賀市にある「（公社）全国愛農会」代表村上真平氏であるというお話を伺い、ぜひ、現地に学ぶツアー企画として、訪問しようということになりました。

２．全国愛農会とは

①全国愛農会の設立

全国愛農会は「土と命を守る担い手の育成や有機農業の普及・教育、有機食品の検査認証などを行っている公益社団法人」（愛農会HPより）です。

愛農会は、全国で唯一の私立農業高等学校「愛農学園高等学校」を1963年に設立し、支援を行っています。また、アジアの農民との連携を進めており、現在は持続可能な農業とアジア農村の発展を目指す「アジア農民の会（AFA)」に加盟しています。

愛農会の始まりについて、愛農会HPでは「1945年敗戦と混乱の飢餓の中、平和の礎である農業を農民自らが主体的に担い守っていくことをめざして、小谷純一が16人の仲間と共に「愛農塾」をはじめました。これが当会の始まりです。翌年に「愛農会」が生み出されました。1955年に農林水産省所管の社団法人全国愛農会となり（2014年に内閣府所管の公益社団法人として認定されています）現在に至るまで、農業・農村の担い手養成をメインとして、持続的で平和な農村・社会を実現しようと国内外で多様な活動を続けています」と紹介しています。

村上真平代表は、発足当時の状況を、次のように語りました。「戦後、１万近い農業団体が全国各地に生まれます。それは、敗戦により世界でも例を見ない農地解放が行われた

ことによります。今あなたが耕している土地、それはあなたのものです、というのです。小作で１ha耕していたならば、その日からそれはあなたのものだ、というわけです。共産主義的な運動の広がりを防ぎたいというGHQの思惑もあったかもしれませんが、戦後の農地解放それ自体は画期的なことでした。私が海外に行き、アジア農民の会の代表として見聞きしたものは、農民の土地がない・少ないということが貧困と深く結びついているということです。アジアは今でも土地問題で苦しんでいるのですが、日本では戦後、農地解放によって自作農を生み出したのです。そのため、国民が戦後食料を必要としており、その上自分の土地になったから100％自分に帰ってくるということで、戦後から農業基本法が出来る1961年あたりまで、農村は豊かで、最も活気があり、希望に満ちていたように思います。」愛農会は、そうした空気の中で、生まれました。

村上真平氏は、愛農会HPの代表メッセージの中で、「愛農会は七十年前、創始者小谷純一の『人類の平和』と『愛と協同の理想農村建設』という二つの祈りによって始まりました。 敗戦直後は食糧増産のための農業技術の研鑽会と「農業者たるまえに人間たれ」という言葉に表される農民の自主独立を確立する愛農教育を全国的に展開し」たと記載しています。その当時の様子を「当時愛農会は、増産運動にも熱心に取り組みました。1963年頃には、日比谷公会堂で全国大会を開催しました。その当時会員は10万人以上おり、全国にオフィスを有する状況の中で、文字通り全国愛農会としての実質を有していました。そのピークの時期に、日比谷公会堂の全国大会には主賓として池田隼人首相を招いていました（今から思えば農業つぶしの先端を走った人ですが）」と述べられました。

しかし、その機運は、減反政策が始まると、一気にしぼんでしまいます。食糧増産に励んだ各種農業団体も次々と消滅していきましたが、愛農会は生き残りました。そのことについて、村上真平氏は、「愛農会が生き残ったのは、愛農会が食糧増産だけを目的とした会ではなかったからだ、と創設者の小谷純一氏は述べていた」と振り返っています。

②有機農業への転換

その一つの表れとして、有機農業への転換がありました。有機農業への転換について、村上真平氏は、次のように語りました。

「愛農会は1972年に有機農業に転換しました。1971年に日本有機農業研究会という団体が出来ていましたが、まだ有機農業という言葉は普及していませんでした。有機農業に転換した理由は何かといいますと、奈良県に簗瀬義亮さん（医師であり、有機農業の父とも言われている方です）が、農民たちの病気をいろいろ見ていく中で、原因不明の病気が多すぎる、なんだろうと調べていったら、その原因が農薬にあることを突き止めました。今はほとんど使われていないBHC、エルドリン、ポリドール、DDTなどを、あたりまえのように素手でまいてた人が農薬の害で病気になっていたのです。そして、農薬等の公害に苦しむ方々の健康を何とかして取り戻したいということで、1959年には「健康を守る会」（財団法人「慈光会」の前身）という団体を作って、早くも196１年には政府に対して農薬の害を進言しています。この簗瀬義亮医師の話を愛農会創立者の小谷純一が聞いて、有機農業への転換が必要と考え、1972年に簗瀬氏を愛農会に招いて話をしていただきました。話を聞いた会員のほとんどは、すぐさま有機農業への転換を決意しました。私の父も、話を聞いて、農薬は使わない、有機農業に転換するということで、当時私は小学生でしたが、家の生活は一変しました。突然、夏休みには朝から晩まで虫取りやらなにやらに駆り出され、夏休みがなくなりました。父がいないときに、弟と一緒に、こんなに朝から晩まで働かされたらプールにも行けないと母に訴え、午前中除草やるから午後はプールに行かしてくれといった交渉を毎日行ったりしたもので

す。」

但し、当時有機農業はまだ認知されておらず、愛農会の有機農業への転換は、会から離れる人々を大量に生み出してしまいました。村上真平氏は、その当時の状況を次のように語りました。

「愛農会は、農業がわれわれの同胞の健康を支える職業ならば、自分の利益のために自分が食べないようなものを作ってよいのかと問いかけ、われわれの健康を支える農法として、有機農業へ転換しましたが、その結果、愛農会会員は10万人から一気に減ってしまいました。ほとんどつぶれかけるところまで会員が減少しました。あの当時は、世の中は発展・発展、規模拡大の時代で，有機農業はそれに逆行する動きでしたから、そうなってしまいましたが、時代に背を向け、有機農業に真剣に取り組む人たちが愛農会に残り、愛農会が様々な有機農業運動のさきがけとなることが出来ました。」

なお、日本有機農業研究会については、同HPに左欄のように設立経緯が紹介されています。

＜日本有機農業研究会設立の経緯＞

発足した1971年前後は、高度経済成長期のただ中であり、農業においても生産性を上げるために農薬・化学肥料・薬剤を大量使用する近代化農業が推進され、その弊害が明るみになってきました。農業者やその家族が生命・健康を脅かされたり、家畜の異変や土の疲弊、環境の悪化を感じとった生産者は、環境・健康を破壊しない農業を実践し始めました。他方、食べ物の安全性と農業・環境の現状に強い不安を抱いた消費者（都市生活者）たちは、無添加食品や安全な卵・牛乳などを求めて活動を始めました。本会の結成は、これらの生産者、消費者を結びつけるとともに、相互の協力連帯のもとで有機農業を確立し社会的に広げていくことになったのです。結成を呼びかけたのは、協同組合運動家で当時協同組合経営研究所理事長をしていた一楽照雄でした。愛媛で自然農法を実践する福岡正信、食べものと健康との強いつながりを指摘し無農薬栽培を進めた医師・梁瀬義亮（慈光会）、農薬禍を憂えて農村医学を創始し、農薬禍を憂えて農村医学を創始した若月俊一（佐久総合病院）らに触発され、初代代表幹事に塩見友之助(元農林事務次官)、常任幹事に一楽ほか3名、事務局長築地文太郎、そして土壌微生物の重要性を説く足立仁、横井利直、自然農法の指導者露木裕喜夫など11名を幹事として、旗揚げしました。

（日本有機農業研究会HPより）

③愛農学園高等学校（愛農高校）

愛農高校は、愛農会が設立した学校ですが、別法人です。愛農高校について、村上真平氏は、次のように述べました。

「愛農高校は、1963年に設立されました。当時、農業高校の卒業生で農業に従事する人は3％以下だといわれていました。そこで、愛農会は、農業が好きでたまらない人間、農業をする人間を育てる目的で愛農高校を設立し、全国の愛農会会員が子どもたちを送り込みました。ですから、3年間授業を受けた後、自分のやりたい経営に近い愛農会会員の農家で１年間実習を行う決まりとなっており、その実習を途中でドロップアウトすると、卒業認定を受けることができない決まりでした（今は卒業後の実習は希望者が参加するやり

愛農高校の農場を見学する参加者のみなさん

方に変わっています）。私の父は、愛農会の初期の頃からのメンバーで、私はその長男で、愛農高校で学んだ一人です。なお、愛農会と愛農高校は別法人ですので、愛農会として有機農業に転換した時期と、愛農高校が有機農業に転換した時期にはタイムラグがあり、私が学んだ当時は愛農高校は有機農業にはなっていませんでした。」

事務局の方の話では、近年は、農家の子どもたちだけでなく、非農家の家庭から、農業の重要性、子どもたちが命に向き合い、土に触れることの重要性を感じて入学してくるケースも多いとのことでした。

実際、高校生が自ら田んぼや畑仕事を担い、畜産（養豚、養鶏など）にも携わっており、愛農高校の食料自給率は75％に達するといいます。愛農高校の様子、校舎造りの取り組みについては、岩波ジュニア新書「日本一小さな農業高校の学校づくり」（品田茂）をご参照ください。

④愛農会の理念と綱領

愛農会HPには、愛農会の理念（モットー）と綱領（指針）が掲載されています。

その理念は「百姓は自立する。生命を守り育む。金にしばられない。大地の恵に生きる。世界をつなぐ心となる。」です。

そして、綱領は「１．われらは、農こそ人間生活の根底たることを確信し、天地の化育に賛して、衣食住の生産に精進せん。２．われらは、人生究極の目的は、愛の実践にあることを確信し、愛農愛人の生活に徹せん。３．われらは、農の真使命を自覚し、愛農精神に充溢して、一切の労苦を歓びとせん。４．われらは、農村の根本的改善は、青年の愛農教育にあることを確信し、身をもって範を示さん。５．われらは、きょう固なる同志的団結を結び、愛と協同の理想農村建設に邁進し、もって新日本建設の礎石たらん。」となっています。

愛農会綱領の1について、村上真平氏は、次のように述べました。

「この言葉の意味は、農業ほど立派な意味のある職業はないと言い切っていることなんですね。世の中に、人間を根底から支える、それがなければないといえるような職業はどれだけあるか、ということなんですね。創設者の小谷純一氏は、農業こそが、この国の人々を養うものだ。そういう意義のあることを本気でやる人間を育てたい、と言っているんです。農という職業が、いかに大切なものかということを宣言した言葉が綱領の１だと思います。そして、天地の化育。天地というのは自然のことですね。化育は育てる力ですね、今の言い方で言えば、自然の生態系に沿って生産するということだと思います。そして、衣食住、江戸時代の人々はすべて自給をしていましたね。人間に必要なものは衣食住燃料、こういうものを農村というのは全部作っていたんです。」

また、２については「愛農会はキリスト教を母体にしていましたので、愛の実践であるとしていますが、よく小谷氏は農業人たる前に人間たれと言っておられました。私も耳にタコできるほど聞かされました。本当の人間にならなければ本当の農業者にはなれない、とよくいわれました」と説明されました。

３．有機農業とは何か

有機農業の場合、常に問題となるのは虫の問題、草の問題だと村上真平さんは言います。実際、有機農業に転換した最初の2年間は、毎日虫取りと草むしりに追われ、にも拘らず虫たちに食い荒らされる状況が続いたそうです。そのときの状況を、村上真平さんは次のように述べました。

「我が家は有機農業に転換していくわけですが、有機農業の場合、常に問題になるのは虫の問題、草の問題です。3年間は悲惨なものでした。だいこんを有機農業に転換して作った。しかし、大根に黒い虫がついて、葉っぱも全部食われて、食い荒らされ、小さいうちに食われるため大体とけてだめになってしまいました。2年間そうした状況が続きました。

それでどうしたかというと、昔のやり方に変えよう。有機物で堆肥を作ろう。同じものは作らないで多様にして輪作にしよう。これは昔からあったやり方ですのでやってみましたが、それでも最初の3年間は、だめでした。2年続けて食われて小さいうちにだめになりました。そうして3年目に入り、ちょっと大きくなったので今度こそはと期待していたら、やはり虫が一杯ついたため、もういいや、だめだったらまたやり直そうと思ってほかっておきました。そうして１ヵ月後に恐る恐る見に行ったところ、一旦葉っぱが全部食われたのに、もういっぺん葉っぱが出て、タイミングがずれたせいか今度は虫がつかなくなって、それで大根が出来ました。その時父が言ったことは、農民は土地に地力があるとかないとか言うが、地力とは何かということはよくわからなかったが、本当に地力のある土というものは、一旦そのようになった後でも戻せる力があるのだ、と言っていました。3年堆肥を入れて化学肥料を入れないでやってきた。そして3年目からいろんな作物も普通に出来るようになって来ましたし、タイミングがだんだんわかってきます。春の作物が、ある時期から出来なくなる時期がありますよね。そのタイミングとか、それから小松菜とかのやわらかいやつで、虫がつきそうなのを最初に植えといて、次の葉物を作る。“トラップ”と言っていましたが、相手に最初に食わせといて、油断している隙にこちらに作る。そうして、最初はキャベツとかの葉物よりは地下茎の根菜類を中心にし、作りやすいものから作っていくうちに、だんだん土が良くなり、環境がよくなっていくなかで、虫や病気があまり問題でなくなってきました。」

有機農業・自然農業は、人為的なことをしないことだとの見方もありますが、実際には、自然の有する多層性・多様性、そして循環ということを農地において意識的に作り出すことです。自然の森は、草むしりをしなくとも、虫取りをしなくとも、施肥をしなくとも、豊かな実りをもたらします。そのバランスを農地に作り出す技法が、有機農業・自然農業です。

自然の有する多層性・多様性・循環性や有機農業・自然農業の技法について、村上真平氏は次のように述べました。

「世界中のいろいろな人に、一番いい土はどこにあるか、聞いてみました。ほとんどの人が、自然の森にありますと言います。自分の土地にあるとは言いません。私の師匠である福岡正信さん曰く「自然の森は誰が肥料をやった？誰が耕した？誰もやっていない。それでパーフェクトな土が出来ている。」私たちが土をつくる場合、窒素・リン酸・カリウムがいる、マグネシウムもいる、最近はサルファーとかいろんなものがいるということで、考えていろいろ入れても、よく出来ない。土はどんどんどんどんだめになっていく。しかし森はどんどんどんどんよくなっていく。何ですか？結論は、人間はおろかだからです。自然は、年がたつ程どんどん豊かになっていくのに、人間は年ごとに壊していって、文明によって農業が起こったところが全部砂漠になってしまう。人間のおろかさはどこから来ているのか。それは、自己中心から来ている。目の前のことしか見えていない。」

「有機農業・自然農業どうしたらいいですか、とよく聞かれますが、それは自然の中に示されています。自然の森は、太陽の光が1ヶ月降り注ごうが、雨が1ヶ月続こうが降らなかろうが、ほとんど問題ないですね。農業にとっては１ヶ月雨が降らないとか降り続くということは大打撃を受けますが、森の場合はほとんど関係ない。何故かと言うと、自然の森は多層です。土の上に落ち葉が一杯あって、草がちょっとあって、小木があり中木があり大木がある。こういう多層によって何をしているかというと、太陽の光と雨を最大限使っているんです。上の光は葉っぱが使い、中間の光、下のほうに行くと葉緑素が多くて少しの光でもやれる。植物というものが太陽の光と雨を使うことにって光合成し、それによって炭水化物を作り、それがすべての動物や微生

物の食べものになって、また帰ってくる循環ですね。持続可能というのは何かというと、循環するということです。循環しないものに持続可能なものはないです。だから、石炭や石油に頼っている社会は持続できない。ウランだって同じです。そうすると地球上持続可能なエネルギーは何かといったら太陽ですね。それを生物が生きれるようにしているのが植物です。そして、その植物の上に動物、われわれ人間がのっかっているんです。その植物・動物が死んだら、それは土に返り、微生物に分解され、二酸化炭素と水蒸気とミネラルに帰っていく。それをまた植物が吸って育つ。この循環、これが持続可能ということです。森は生命が生きていける環境を多層性によってつくっている。」

「赤道直下の砂漠と熱帯雨林どちらも行きました。赤道直下の砂漠においては日中50度を越え、頭がくらくらするので毛布のようなものを被っていないとどうしようもありません。でも夜になると10度以下になります。あんなところには人は住めない。動物もほとんどすみません。しかし、熱帯雨林では、外の光が当たっているところで35～36度になっても、熱帯雨林の中に入れば28度です。夜も下がりません。27度ぐらいです。多層性の中で、空気が暑くなったり寒くなったりしない環境をつくり、そこに生命が住めるようにしている。だから人間ももともと森の中にいましたよね。でも人間は、1万2千年前頃といわれていますが、農業を発見して、すべての生活を森に頼るところから、森を壊して自分の好きなものを作る農業を発見したんですよね。でも、持続可能でなかった。古代文明は滅びました。持続可能なものは、そこで出来たものはそこに帰っていく循環性がある。太陽の光と雨を最大限使うような多層性が必要です。そして、ひとつのものに頼ってそれがこけたら皆こけてしまいますので、必ず多様になる。植物は、住む場所もものすごく多様になります。それを食べる動物もみんな多様になる。多様になれば、多様な関係性の中で一つが崩れても回復できる。隕石がぶつかって恐竜が滅びても生き延びた他の生き物が進化していって人類も生まれたのですよね。生物多様性によって生命はずっと続いているんです。多様性がなくなれば生物は滅びます。だから、自然の森は必ず多様であり、多層であり、そして循環です。でも農民は何をするか。土を耕して、草をむしりとって裸にして、多層性を壊す。大雨が降れば土が流される。そして、収穫したものは持っていってしまう。循環が断ち切られます。そして自分の好きなものしか作らないから単一性となり、多様性も破壊する。多層性、多様性、循環が不可欠なのに、それを全部壊している。自然を利用できると思ったときから、だめになった。しかし、文明をいくつか滅ぼした人類も、それほど愚かではないから、堆肥や緑肥などで土に返すということを学び、伝統的な農業はずっとそれを続けてきました。それから、作物も同じものをずっと植えない。いろんなものを植えて変えていく。輪作多様作というのは世界中の農民がやっています。キャベツとねぎを一緒にするとねぎのにおいで虫が寄ってこないとか、とうもろこしとマメ科を置くと、とうもろこしは一杯吸う、ところがマメ科は窒素固定をする、ということでコンビネーションを行う、いわゆるコンパニオンプランツ、これもどこでもやっていることです。農民は、自然がぜんぜん問題なく続いていくその姿から学んできたんです。自然は問題なく続いているのに何故俺たちのはだめになるのだろうと考えて、返さなきゃいけないんじゃないか、同じものじゃだめなんじゃないか、そういうことを自然から学んで、戦前の日本の農業は営まれてきました。農薬肥料がなくてもちゃんと生産できていたんです。ところが、今の科学は、農薬化学肥料というものを作ったときに、そこを無視しました。害虫駆除とか言いますが、絶対害虫、絶対雑草というものはないんです。タイに行ったときに、たまねぎを作っていたのですが、そこで除草剤が使われていました。何の除草剤かと聞いたら、イネを殺す除草剤

だという。なぜかと聞くと、イネを収穫した後に水をかけてたまねぎを育てるのですが、そうすると米の種があるので一斉に発芽してたまねぎが小さくなっちゃうからといって、イネを殺す除草剤をまくんです。私は初めてみました。ということは、彼らにとってそのときのイネは雑草なんです。イネを作っているときイネは雑草じゃないんです。でも、たまねぎを作っているときはイネは雑草なんです。虫も同じです。自然の中で虫はバランスの中にいる。頂点に位置するライオンやワシなどは、底辺の虫が減ってくると真っ先に滅びてしまいます。何故自然は虫で滅びないのか。害虫といわれるような虫もいるが、自然の中ではある程度以上増えない。自然は増えないバランスを作っており、そのバランスを作れない私たち農民は、ちょっと虫がきたら大変だとパニックになって殺そうとするが、害虫の天敵も殺してしまってもっともっと大変だとなってしまう。ところが、今の農芸化学は何をやっているかというと、害虫図鑑・雑草図鑑を作ってこれらはすべて絶対悪だからなくしましょう、とやる。モンサントは遺伝子組み換えをして、ラウンドアップ（除草剤）をいくらまいても死なないよというのをつくって、これでラウンドアップを2～3倍まけば雑草はだめになり、収穫があります、とやった。多くの人たちが作っていますが、今アメリカで問題になっているのはスーパー雑草です。ラウンドアップ2倍かけてもまだ強いのが出てきた。当たり前です。自然というのはそれに対応してくるのです。もっと強いのもっと強いのとやっていけば、最後には人間も自然もだめになってしまいます。今の世界の農業がやっていることは、問題になるものを消し去ることです。でも問題は違うんです。何で虫が出るか。それは、そこの生態系環境が壊れたからです。有機農業・自然農業を日本で始めて40年になりますが、虫でだめになったことは一度もないです。１割ほど食われたら今回はちょっと食われたなという感じです。5％ぐらいはまあ虫に食われてもいいかなあと思ってやっています。一番いいのは、葉っぱの一番外側の表面に一匹2匹の青虫さんとさなぎがついていて、中は食われない。私はこの形が一番いいと思っています。そういうことは実際起こります。森と同じ状態はなかなか作れませんが、土が健全で、雑草といわれるものも含めて、植物が多様になっていく環境を作ってやれば、虫をどうしようかとか、病気をどうしようかなどという考えはいらなくなります。命の目的は自分の子孫を残すことです。森の中の生き物たちは皆自分の子孫を残していくことを考えています。例えばモンシロチョウは、卵から成虫になるまで1ヶ月足らずですが、1回で100個ぐらいの卵を生みます。それが続けば大変な数になりますが、実際にみかけるのはせいぜい10匹ぐらいです。残りはみな他の生き物に捕食されるのです。それでも彼らが生き延びていけるだけの形態を作っているから、モンシロチョウも生き延びていきます。病原菌といわれるような菌も、それがいなくなったらどのような影響を生態系にもたらすかは誰もわからない。それだけ複雑なのです。多様性を失うことによって、それまで害虫といわれなかったものが害虫になってしまうということも起こりうる。戦前の害虫図鑑と戦後の害虫図鑑では数がまったく違う。根絶やしにしようとするからそうした問題も起きる。自然の持続可能な生態系は、必ず多様で循環です。その場にあるエネルギーと資源である水を使うシステムを持っている多層性です。そうした生態系の中でしか人間は生きていけない。せっかく人類は万物の霊長といわれるような知恵を持ちながら、それを自己の欲望を増長する形で科学を使ってしまっている。安倍さんはゲノム編集をこれからの成長産業だといい、ゲノム編集したものを表示する必要はないといっていますが、あきれてしまいます。害があるものをゲノム編集で消すのは、遺伝子組み換えではないといっているのですが、生命38億年の年月の中で作られてきたものを人為的に消し去った場合どうなってしまうのか、誰が

その結果に責任をもてるのか。とんでもない話です。核の問題もそうですね。138億年かけて作られてきた宇宙の物質を、壊して人為的に作るのが核の問題。人間の浅知恵で壊すのは、おかしい。人類が自然の中から選んで選んで品種改良してきたものと、遺伝子組み換えで作るものはまったく違う。それから、よく堆肥を入れたらよいとか有機質を入れたらよいということで牛の糞を一杯入れるという話を聞きますが、これは必ず問題を起こします。考えてみてください。自然の森でも猪や鹿が糞をします。しかし、虫の糞を含めてもせいぜい20％ぐらいです。ほとんどは植物性です。そうであるならば、いい土のバランスというものは、動物の糞20％、残り80％を植物由来のもの、特にCN比（炭素率）が高いものをきちんと入れればよい。そして、入れるのは一種類ではなく、多様であれば多様であるほどバランスが良くなります。これは自然が私たちに教えてくれていることで、何も難しいものはない。きちんと有機農業･自然農業をやっている人たちは、そういう技術を持っています。健全な土には健全な作物が育ちます。不思議と虫とか病気がなくなります。土にきちっとした有機物をいれ、循環させていく。そうすれば、人間の体にいいものを作ることが出来ます。」

なお、愛農会は有機食品の検査認証制度にもとづく登録認証機関でもありますが、愛農会HPに「認証の手引き」が掲載されており、そこに「愛農会がめざす『有機農業のありかた』」が示されていますので、参考に掲載します。

愛農会がめざす「有機農業のありかた」

１．食料および生産資材の地域自給を可能なかぎり目指します。とくに在来種の使用・保存に努め、遺伝子操作された資材の使用を可能なかぎり避けます。
２．生物的・物理的・土壌肥料的に豊かな土づくりを心がけ、長期的に土壌の地力を維持します。
３．農業技術がもたらす懸念のあるすべての環境汚染を可能なかぎり回避します。
４．化石エネルギー（資材も含め）の使用を最小限にとどめます。
５．すべての家畜に対して、その生理的必要性に適合した環境・飼料等の飼養条件整備を可能なかぎり措置します。
６．生産者と消費者が連帯提携し、再生産を可能にする経済的・心理的な対価の実現を図ります。
７．農場の環境を保全し、微生物・動植物等の共存生物相の多様性を可能なかぎり維持・育成しつつ生産活動を行ないます。
８．土と命を守る有機農業による生産者と消費者の提携を推進します。

愛農会HP「認証の手引き」より

４．国連「家族農林漁業の10年」とSDGｓ

村上真平氏が国連「家族農林漁業の10年」を日本で進める組織である「家族農林漁業プラット・フォームジャパン（SFFNG）」の代表就任に至る経緯については、月刊「愛農」（創刊から40年以上続く機関誌）2019年8月号に掲載されています。

それによれば、まず2014年の国際家族農業年以来、小規模・家族農業支援を呼びかけて活動してきた仲間たちにより「小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン（SFFNJ）」が設立され、小規模・家族農業を農業・食料政策の中心に位置づけることを求める運動を開始。アジア諸国の農民団体の連合体であり、家族農業年の制定に向けて提言活動を行っていた「アジア農民の会（AFE）」の議長を2014年に愛農会が務めていた縁で、SFFNJの賛同団体として愛農会も名を連ねていました。
そして、国連家族農林漁業の10年の呼びかけに応え、2019年にSFFNGを設立することになりますが、その際SFFNJの代表であった関根佳恵愛知学院大学准教授から代表就任の要請があり、引き受けるに至ったとされています。

村上氏は、家族農業について、次のように

述べました。

「国連も家族で農業すればすばらしいといっているわけではありません。家族農業は、環境を守り、生物多様性を守り、地域を守り、文化を守る。そうした人々であるから、家族農業は大事だといっています。今そうしていなくても、そうした人々はその地域に住みその地域を守っているから、持続可能性を考えたときに彼らは変わる、だから大切だといっているんです。企業は何故だめかというと、地域を捨てて出て行ってしまうから。以前こんなことがありました。私が土地を借りようとしたところ、その前にその土地の所有者は企業に貸していたが、黒マルチを張ったまま逃げていくならまだしも、最後に黒マルチを全部耕して出ていってしまった。私も耕してみたけど、あっちこっちからマルチが出てその土地は使えないのです。こんなことをもし村の人間が借り手としてやったら袋叩きにあうでしょう。みんな知っているからやらない。企業は知らないから、旅の恥は掛け捨てと、経費削減のためならばとんでもないことをやってしまう。だから、今国連は、大規模企業農業に夢を持っていません。一番大切な食べものを作り、小さいながらも自然を守り、地域を守る家族農業の人々なしには、世界は続きません。これが、国連のメッセージです。そういう意味で、私たちは勇気づけられます。1980年代ごろに私が有機農業と言っても何言ってるんだと言っていた人々が、アグロエコロジーだとか言い出して一所懸命やり始めている。科学農業の先端をいっている世界の研究者たちも、多様性でやってください、循環でやってください、と言うようになってきました。一番変わっていないのは、日本政府です。」

また、2015年に国連で採択されたSDGｓ（持続可能な開発目標）について、村上さんは次のように述べました。

「愛農会が生き残った意義、これからの役割としては、SDGｓ、持続可能な社会を作らなければならないということだと思います。目標となっているということは、今の社会は持続可能ではないということです。このまま続くならば、私たちや私たちの子どもたちに責任が持てないことをしているんだということです。気候変動に代表される環境変化には大変なものがあって、このままいくと世界の中で住めなくなるエリアが生み出されてくる。そうなると、その地域の人々は移動せざるを得なくなる。それは、平和を脅かす大変な事態を引き起こしうる。そうしたことが近未来に起こることははっきりしている。しかし、このことを深刻に感じている人々がまだ多くないという問題があります。もう一つは、世界の平和を考えるときに、戦争の根幹にあるのは貧困です。それはグローバル経済によって作られている問題です。2月にスイスのダボスで世界経済フォーラムが毎年開かれます。ここに世界経済を牛耳っている人たちが集まってきて議論をする。私に言わせれば、どうやって自分たちの儲けを維持しようかと議論しているわけですね。それに対抗するNGOの運動があり、貧困問題などに鋭い問題を投げかけてきたイギリスのオックスファムというNGOが、フォーラムの前日に、毎年ある試算を発表しています。それは、世界の人口の半分の人々の有する資産と同程度の資産を有する世界のトップの人間は何人か、というものです。当初は、200～300人ぐらいから始まったのですが、年々減っていき、私がショックを受けたのは、4年前ですが、世界の64人の大富豪の総資産は、貧しい方から35億人の総資産と同じだと発表しました。もうひとつ驚いたの

は、過去5年間で見ると、貧しい35億人の総資産は42％減った一方、64人の大富豪の総資産は過去5年間で40％増えたというのです。これほど明確な、格差と貧困の広がりを示すエビデンス（証拠）はありません。どんなに安倍さんが公正なルールに則ってと言っても、貧しい35億の人たちの総資産は5年間で42％減って、64人の富裕層の総資産が40％増えたという事実は、グローバル経済がどれほど不公平なものかを如実に示していますし、私は20年間の海外協力活動を通じて、お金のためだといって環境を壊し、お金のためだといって貧しい人たちを収奪している状態を、実感してきました。こうした社会が続けば、環境は破壊され、貧困が増大し戦争に至ることになります。この二つの問題は、人類を滅亡に至らせる危険性があります。私は、2001年に20年間の海外協力に終止符を打ち、日本に帰る決意をしますが、そんなことを考えていたときに、アメリカ9・11同時多発テロが勃発しました。その時ブッシュ・ジュニアは、われわれは何も悪いことはしていないのにむちゃくちゃなことをされた、テロとの戦争だと宣言し、世界の人々に旗を見せろ（ショーザフラッグ）とやりましたよね。アフガニスタンへの攻撃を開始しました。私は、このテロを見たときに、貧しい人の怒りはここまできているのか、という思いを抱きました。このまま行くと、環境問題で人類は危機に瀕するし、貧困と格差の深刻な拡大は、絶望的なテロ行為を生み出してしまう。こういう社会を作ってしまっている私たちは、少なくとも世界平和を目指していくならば、SDGｓを目指す必要がある。世界中の人々が、自分の日々の行動や企業行動において、環境的に健全であるかを常に考える必要がある。また、社会的に本当に公正なのか、自分の利益のために不公正をしていないか、きちんと考えていく必要がある。経済的には公平にする。そして、文化的には多様性を認める。環境、社会･経済、文化について、一人ひとりが本当に自覚し、取り組んでいかない限り、この問題は解決しません。SDGｓの取り組みは、そういうメッセージであると私は感じています。」

「自分たちの子どもたちが、安心して平和に過ごし、自然環境に恵まれ社会を、次の世代、その次の世代にちゃんと残していくことが、今の私たち世代の責任ではないか。自分たちさえ良ければよいということでは、どうしようもない。この貧困･格差を作っているグローバル経済、世界1位の個人資産、アマゾンの人、いくらかご存知ですか。12兆円です。2002年に日本に戻ったときに愛農会で話したのですが、当時１位はビルゲイツでしたが、当時いくらだったかご存知ですか。3兆円です。3千万の資産を持っている家族10万家族に相当する。もうあきれて笑うしかない。いま、飢えに苦しむ人は8～9億人いるといわれています。こうした世界の状況に対し、私たちも緊密につながって生きているわけですから、自分たちがどういう生き方をするのか、が問われている。今を生きる人間として、きちんとした、そうしたことを考えた対応、生き方というものを、農業においても考えていく必要があると思う。そうしたことを集約した言葉が、SDGｓだと思います。」

５．おわりに

村上真平氏は最後に、「これから20年が勝負だ。ボトムアップで、地域から変えていきましょう」と呼びかけられました。

そういえば、最近出版された『きみのまちに未来はあるか？-「根っこ」から地域をつくる』（除本理史・佐無田光著：岩波ジュニア新書）という本の中で、朝日新聞に掲載された、京都大学の研究チームが人工知能（AI）を使って行った日本社会の未来予測の紹介がされていました。

そこでは、未来予測には約2万通りのシナリオがあり、2020年代に大きく「都市集中型」と「地方分散型」に分かれる、としているそうです。そして、都市集中型の場合、地方の衰退、出生率の低下、格差の拡大が進むが、地方分散型ではそうした問題は起きない。し

かし、地方分散型のシナリオは政府の財政悪化、環境負荷の増大を招く。財政や環境の悪化を避ける持続可能な地方分散シナリオを軌道に乗せなければならないが、その分かれ目は2030年代後半、だそうです。

まさに、これからの20年が分かれ目となります。

東海自治体問題研究所は、地方自治の民主的発展を願って、1973年に設立された非営利の自主的な調査研究団体で、2023年に創立50周年を迎えます。

私たちは、半世紀に及ぶ研究所の活動を総括し、これからを展望する調査・研究活動に取り組む必要があると考えています。

今、貧困と格差の拡大が懸念され、気候変動等に伴う大規模災害を継続的に経験し、豚コレラや原因不明のアコヤ貝の大量死などに直面し、そして今まさに、新型コロナウィルスのあっという間の世界的大流行とそれに伴う平時の非常事態宣言で経済的・社会的機能が麻痺していくような事態を目の当たりにするとき、今のままの社会のあり方で本当によいのか、真剣に考えなければならない時代に差しかかっていると感じます。

過去の到達点から未来を展望すると同時に、現在直面する深刻な事態にどう立ち向かうのかという視点から未来を展望し、持続可能な地域のあり方、制度や政策のあり方を、一人ひとりの生き方の問題として問うていくことが必要ではないでしょうか。

今回の「愛農会に学ぶ旅」は、農業を通して環境、地域、文化に向き合い、持続可能な社会を展望されているお話は、深く心を揺さぶるものがありました。

今度は、私たちが、この地域の調査・研究活動を通じて、持続可能な地域・地方自治をどう展望するかを語る番です。

50周年を、そうしたことを語り合う場として迎えることが出来るよう、お互いに、知恵と力を尽くしましょう。